

クリスマス礼拝（2024年12月22日）

## すべての人を照らす光

ヨハネの福音書 1章 9-13節

### はじめに

今朝は、「クリスマス礼拝」ですが、「クリスマス」というのは、皆さんもご存知の通り、イエス・キリストの誕生を祝う時です。このクリスマスは、四世紀の中頃から祝われるようになったと言われていています。それから約1,600年の間、クリスマスは世界各地で祝われるようになって、様々な文化を生み出してきました。

しかし、そもそもなぜイエス様の誕生は、こんなにも世界中で祝われるようになったのでしょうか。それは、イエス様がただの偉人や聖人ではなく、神様そのものであると信じる人々が世界中にいるからではないかと思います。クリスマスというのは本来、神様ご自身が、人間という姿を取ってこの世界にお生まれになった、という驚くべき出来事を覚えて、喜び祝う時なのです。

先程読んだ聖書の箇所は、「イエス・キリスト」という言葉は出てきませんが、イエス様について書いてある聖書の箇所です。「**この方**」と書いてあるのが、イエス様のことです。10節には、「**この方はもともとから世におられ、世はこの方によって造られた**」とあります。つまり聖書によれば、イエス様はこの世界を造られた「神様」なのです。

ではなぜ、神様ご自身であるイエス様は、わざわざ人間の姿を取ってこの世界にお生まれになったのでしょうか。その目的は、一体何だったのでしょうか。

### 1. すべての人を照らすために

イエス様がこの世界にお生まれになった目的の一つは、9節にあるように「すべての人を照らすため」でした。イエス様はここで、「**すべての人を照らす**」「**まことの光**」と呼ばれています。「光」の役割は、暗闇を照らすことです。暗闇が光に照らされると、そこに存在しているものが見えてきます。暗闇の中では、どこに何が存在しているのか、存在しているものがどんな形をしているのかが分かりません。私は寝る前に部屋の電気を消しますけれども、電気を消してからベッドに着くまでの間によく物に足をぶつけます。それは、暗闇の中では存在している物が見えないからです。しかし光に照らされれば、足をぶつけそうなものがよく見えて簡単によけられるのです。そのように光というのは、存在しているものをよく見えるようにする役割があります。イエス様も、存在しているものがよく見えるようにするために、この世界にお生まれになったと言えると思います。

#### ① **神様が見えるように**

イエス様が「まことの光」として、この世界にお生まれになったことによって、私たちに何が見えるようになったのでしょうか。それは第一に、「神様」という方がよく見えるよ

うになったと言えます。聖書によれば、神様は世界を造られた方です。そして神様は、この世にただ一人しかおられません。日本においては、いくつもの神様が存在すると考えられています。自然も先祖も偉人も皆、神様として崇められています。しかし聖書によれば、神様はただ一人しかおられません。そしてその神様は、永遠の昔から存在し、この世界を造られたと言うのです。その神様は、霊的な存在で、目には見えない方です。聖書にも、「**いまだかつて神を見た者はいない**」(ヨハネ 1:18)とあります。しかしイエス様が、この世界にお生まれになったことによって、今まで目に見えなかった神様という方が、どういう方なのか、目に見えるかたちで、はっきりと私たちに示されたのです。私たちは、イエス様を見る時に、この世界を造られた、ただ一人のまことの神様という方が、どういう方なのかを知ることができるのです。イエス様は、「まことの光」として、私たちが「神様」という方がよく見えるようにしてくださったのです。

## ② 人間のあるべき姿が見えるように

第二に、イエス様が「まことの光」として、この世界にお生まれになったことによって、私たちは「人間のあるべき姿」というものがよく見えるようになったと言えます。聖書によれば、イエス様は罪のない生涯を歩まれました。それは、神様を愛し、人を愛して生きられたということです。イエス様は、徹底的に神様に従い、貧しい人や病気の人、罪人と呼ばれる人、そのように当時社会から疎外されていた人たちに寄り添い、共に歩まれたのです。イエス様は、そのように徹底的に愛に生きられたのです。旧約聖書の律法には、神様が私たち人間に求めていることは、神様を愛し、人を愛することだと教えています。イエス様はまさに、その生涯において、神様を愛する生き方、人を愛する生き方を体現し、私たちに本来の「人間のあるべき姿」というものを示されたのです。イエス様は、「まことの光」として、私たち「人間のあるべき姿」というものがよく見えるようにしてくださったのです。

## ③ 自分自身が見えるように

第三に、イエス様が「まことの光」として、この世界にお生まれになったことによって、私たちは「自分自身」というものがよく見えるようになったと言えます。イエス様によって「人間のあるべき姿」を示されることによって、私たちは「自分自身」がいかに、本来の「人間のあるべき姿」から離れた生き方をしているのかを知らされます。

「人間のあるべき姿」から離れた生き方をしている状態を、聖書では「罪」と呼びます。つまり、神様を愛する生き方をしないこと、人を愛する生き方をしないことを、聖書は「罪」と呼ぶのです。言い換えれば、神様の存在を認めず、神様に背を向けて従わず、人に無関心で、人を傷つけて生きることを「罪」と呼ぶのです。その根底にあるのが、私たち人間の「自己中心」という性質です。神様よりも自分、人よりも自分、そういう生き方を聖書は、「罪」と呼ぶのです。さらに聖書は、すべての人間が例外なく、そういう意味での「罪」を持っていると言うのです。

私たちは普段の生活の中で、「自分自身」に罪があるとはあまり思わないかもしれませんが。

「罪」とは、日本の法律に違反すること、警察に捕まるようなことをすることと考えるのが一般的でしょう。多くの人は、自分は警察に捕まることもしてないし、それなりに人ともうまくやっている、どちらかというとも真面目に生きてきた、だから自分には「罪」がないと思うでしょう。しかし光に照らされると、今まで見えなかったものが見えてくるのです。例えば、窓から差し込まれる太陽の光に照らされると、今まで見えなかった空気中のホコリが見えてくるように、イエス様という光によって、私たちの心の中まで照らされると、私たちもこれまで見えなかった自分の中にある「罪」というものが見えてくるのではないかと思います。イエス様の生涯と自分の人生を比べてみる時に、私たちには罪がないと、はっきりとは言い切れなくなるのではないのでしょうか。

イエス様がこの世界にお生まれになった目的は、今まで見えなかったものを見えるようにするためです。「神様」という方がよく見えるようにするため、「人間のあるべき姿」というものがよく見えるようにするため、さらに私たちの中にある「罪」というものがよく見えるようにするために、イエス様はこの世界にお生まれになったと言えると思います。

## 2. 神様の愛が見えるように

さらにもう一つ、イエス様が「まことの光」として、この世界にお生まれになったことによって、あるものが私たちによく見えるようになりました。それは、「神様の愛」です。

イエス様は、この世界にお生まれになって、わずか三十数歳でこの世を去りました。イエス様の生涯の最後は、十字架に張り付けにされて殺されるというものでした。イエス様は、私たちに「神様」という方がよく見えるように、「人間のあるべき姿」というものがよく見えるように、さらに私たちの中にある「罪」というものがよく見えるようにするために、この世界にお生まれになりました。今から約二千年前の出来事です。

では、二千年前の人々は、イエス様を歓迎したのでしょうか。「神の子が生まれた」と喜んでのでしょうか。現代のクリスマスのように、イエス様の誕生を楽しく華やかに喜んでのでしょうか。そうではありません。11節には、「**この方はご自分のところに來られたのに、ご自分の民はこの方を受け入れなかった**」とあります。二千年前の人々は、イエス様を受け入れなかったのです。イエス様を「神様」だと認めなかったのです。イエス様によって、「人間のあるべき姿」が示され、それと同時に自分の「罪」が示されると、人々はイエス様を憎み、消し去ろうとしたのです。人々は皆、自分の中にある「罪」を認めたくないし、向き合いたくないからです。イエス様という「光」に照らされると、自分の「罪」が見えてしまう、だから人々はイエス様を消し去り、暗闇の中に留まろうとしたのです。

歴史的に見れば、イエス様は悲惨な死を遂げた方です。罪のない生涯を歩まれ、神様を愛し、人を愛し、徹底的に愛に生きられたのです。それにも拘らず、イエス様は人々に憎まれ、拒否され、十字架に張り付けにされて殺されたのです。イエス様の死は、全く不条理なものでした。現代のクリスマスのような華やかさとは、全く対照的です。

しかし聖書は、イエス様の十字架の死に対して、積極的な意味を与えています。キリス

ト教をアジアやヨーロッパへと伝えた使徒パウロは、新約聖書の中でこう言っています。**「私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれたことによって、神は私たちに対するご自分の愛を明らかにしておられます」(ローマ 5:8)**。イエス様の十字架の死は、「神様の愛」を明らかにするものであったと言うのです。しかも、イエス様は「私たちのために死なれた」とも言っています。二千年前のイエス様の十字架の死は、単なる悲惨な死ではない、イエス様の十字架の死は、「私たちのため」であると言うのです。

先ほど、私たち人間は、例外なく「罪」を持っていると言いました。その「罪」とは、神様の存在を認めず、神様に背を向けて従わず、人に無関心で、人を傷つけて生きることであり、その根底にあるのが、私たちの中にある「自己中心」という性質だと言いました。神様よりも自分、人よりも自分、そういう生き方を聖書は、「罪」と呼ぶのだと言いました。使徒パウロによれば、イエス様は「罪人」のために死なれたのです。その「罪人」とは、警察に捕まるような犯罪者のことだけではありません。「自己中心」の性質を持っていて、神様を愛さない生き方をする、人を愛さない生き方をするすべての人を、ここで「罪人」と呼んでいるのです。その意味では、ここにいる「私たち」をも含まれます。

日本社会でもそうであるように、「罪」は必ず裁かれなければなりません。そして罰を受けなければなりません。「罪」を見過ごしにすること、曖昧にすること、それは決して「愛」ではありません。神様も、私たち人間の「罪」を決して見過ごすことはできません。しかし神様は同時に、私たち人間を愛してもおられます。神様は、私たち人間の「罪」を罰し、同時に私たち人間を愛する、そういう方法を探られました。その結果、見出されたのが、私たちが罰する代わりに、イエス様を罰するというものでした。神様ご自身であるイエス様が、人間の姿を取って、私たち人間のすべての「罪」を背負って十字架に架かって罰を受ける、そのことによって神様は、ご自身の正義と愛の両方を満たそうとされたのです。ご自身の犠牲によって、私たち人間を「罪」の裁きと罰から救おうとされたのです。その意味で、イエス様の十字架の死は、「私たちのため」であり、「神様の愛」を明らかにするものであったのです。

## **おわりに**

イエス様は、「すべての人を照らす光」として、この世界にお生まれになったことによって、「神様」という方がよく見えるように、「人間のあるべき姿」がよく見えるように、私たちの中にある「罪」というものがよく見えるようにされました。さらに、私たちに対する「神様の愛」を明らかにされました。しかし二千年前の人々は、イエス様を受け入れませんでした。イエス様は、ご自身を受け入れることを、私たちに求めておられます。

12節には、「**しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった**」とあります。イエス様を「受け入れる」とは、イエス様を「信じる」ことです。つまり、イエス様こそ「神様」であり、私たちの「罪」の身代わりに十字架で死なれた救い主であると「信じる」ことです。では、イエス様を信じる時、私たち

にどんな特権が与えられるのでしょうか。それは、「神様の子ども」となる特権です。

「子ども」というのは、一般的に親の「愛」の中で育ちます。ですから「神様の子ども」となるということは、神様の「愛」の中で生きることを意味します。現代の日本社会は、戦後の焼け野原から高度経済成長期を経て、物質的には豊かになりました。しかし「愛」においてはどうでしょうか。現代の日本社会は、「愛」において豊かになったのでしょうか。インドのスラム街で、貧しい人々の救援活動を行い、ノーベル平和賞を受賞したマザー・テレサが、日本に来日した時、上智大学で講演をしました。その時、マザー・テレサは、日本における「愛の貧しさ」を見抜いて、こう言いました。**「貧しい者は、パンに飢える人や路上生活者だけではありません。豊かさの中にあっても、愛に飢える人、社会から見捨てられる人はもっと貧しい。食べ物がないことから起こる飢えは、ある意味ではずっと取り除くのがやさしいものです。それよりもっと困難なのは、精神的な飢え、愛の渇き、心の飢えの方です」**。マザー・テレサは、日本は物質的には豊かになったけれども、愛においては決して豊かになっていない、愛において貧しい人、愛に飢えている人が多くいることを見抜いていたのです。そして彼女は、物質的な貧しさよりも、愛の貧しさの方がより深刻だと言ったのです。

イエス様がこの世界にお生まれになったのは、一言で言えば「愛」のためです。神様を愛する生き方、人を愛する生き方を私たちに示し、私たちに対する「神様の愛」を示すためです。このイエス様こそ「神様」であり、私たちのために十字架で死なれた救い主であると「信じ受け入れる」時、私たちはすべての罪が赦され、「神様の子ども」として「神様の愛」の中で生きることができるのです。そして、「愛」において「豊か」にされるのです。

クリスマスの華やかさの背後には、「愛」があります。だからこそ、人々は互いにプレゼントを贈り合い、サンタクロースは子どもたちにプレゼントを贈るのです。ではそのクリスマスの「愛」はどこから来ているのでしょうか。それは、イエス様によって示された「神様の愛」から来ているのではないのでしょうか。どうか皆様にも、イエス様を信じ受け入れていただき、「神様の愛」の中で生きていただきたいと切に願います。

天におられる私たちの父なる神様。

クリスマスの華やかさの背後には、あなたの「愛」があります。だからこそクリスマスには、温かさがあります。クリスマスに祝われるイエス様は、私たちに対する「神様の愛」を明らかにするため、また「私たちのため」に十字架で死なれました。どうかあなたを信じ受け入れて、私たちをあなたの愛の中で生かしてください。そして、私たちの罪で暗闇に包まれた世界に、愛の光を灯してください。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。